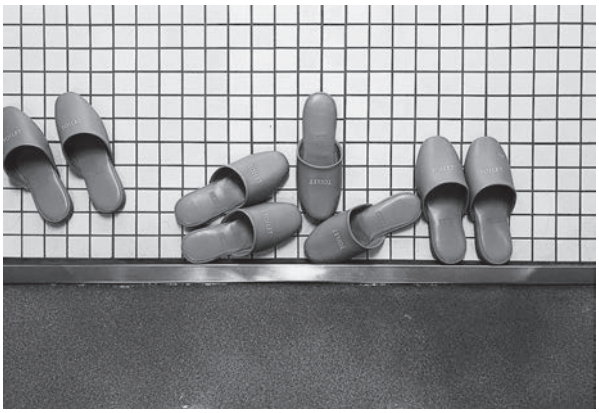

神奈川大学 国際寮

のに対し、日本には明治時代（1868-1912）まで思考と感覚という二分法が存在しなかったことは明らかである。動法[2]の開発者である野口裕之（1948-）によると、

> *日本の教育は身体の教育であった。頭で憶えることより、「身体で覚える」ことに重きが措かれ、頭で理解することより、「身体で感じとる」ことが尊ばれたのである。*
> *（「動法と内観的身体」1993、p. 4）*

こうして私は、自分自身の身体の知覚から日本の文化芸術表現を経験しようと、能の公演やリハーサル、舞踏のワークショップ、動法の稽古などに参加した。また、一時的に日本で生活した。それはすなわち、自分が慣れているものとは異なる建築規模で暮らすこと、異なる動きや扱いを必要とする和服を試すこと、土地の人間には明白だが私には見えない内的外的限界の存在を知ること、沈黙を重んじること等を意味する。これらのことは、これまで自分が訪れた西洋のどの国とも依然として異なっている日本人独特の知覚があることを私に教えてくれた。

同時に私は、大都市には（程度の差こそあれ）見慣れた構造があることや、新自由主義の価値が広範に受け入れられ、現地の価値に取って代わっていることも知った。David Harvey（1935-）は次のように証言している。

> *新自由主義化のプロセスは多くの「創造的破壊」を引き起こした。その対象は、従来の制度的枠組みや権力（国家主権の伝統的形態に対してさえ異議申し立てが行われた）だけでなく、分業、社会関係、福祉供与、科学技術構成、生き方、考え方、生殖活動、土地への愛着、心の習慣にまで及んでいる。新自由主義が市場での交換を「それ自体が倫理であり、人間のすべての行動の指針となることができ、従来のすべての倫理的信念に取って代わるもの」と評価している限り...*
> *（「A Brief History of Neoliberalism」2005）*

1500 年以上にわたって美しく発展してきた日本の身体動作を維持することは、新自由主義による大衆化プロセスに抵抗することをも意味している。抵抗は、メディアが流布するあらゆる価値と現代社会の快適さの中で、批評眼と自己肯定を必要とする非常に困難な行為である。しかしこの身体動作は、難しい、ペースが遅い、理解しにくいと言われながら、今日でも能や舞踏や動法で実施されている。そしてこれらはすべて、心、感情、感覚という万人に共通のものと関わっているのである。

［注］
(1)「経験」については、ヴァルター・ベンヤミンのエッセイ“Experience and Poverty”を参照。参考テキストはポルトガル語版 Experiência e Pobreza in Obras escolhidas. Vol. 1. Magia e técnica, arte e política. Ensaios sobre literatura e história da cultura. São Paulo: Brasiliense, 1987, pp. 114-119.
(2) 動法は東京の整体協会・身体教育研究所所長 野口裕之によって開発された。野口は父親の野口晴哉（1911-1976）によって開発された整体法の観点から、日本の芸術文化表現の多くに見られる身体の動きの原理と感覚的理解について研究した。

参考文献：
野口裕之「動法と内観的身体」『体育の科学』第 43 巻 第 7 号 1993 〈http://keikojo.com/koukaikouwa_schedule_files/1993_doho_to_naikan.pdf〉2018 年 1 月 24 日閲覧
HARVEY, David A Brief History of Neoliberalism. New York: Oxford University Press Inc. 2005

相互交流の重要性に気づいた研究員生活

田　哲熙
（漢陽大学校）

神奈川大学非文字資料研究センターで 1 月 11 日から 31 日までの 3 週間、訪問研究員として滞在した。私は

1935年前後の日本の文学批評について研究を行う計画を立てていた。私の専攻は韓国文学であるが、1945年以前まで韓国の文学者たちは、日本の言説に多くの影響を受けていたため、日本の文芸批評を勉強することが、後に韓国文学を研究するのにも役立つだろうと予想したからである。

ところがこのような研究計画は、「非文字」という概念から少し離れたものであることに気づいた。しかしながら非文字資料研究センターには、様々な芸術や文化に関する資料が網羅されており、私は日本語が下手で日本語をスムーズに読むことはできないが、資料の中には、図、映画などもあって、気軽に見ることができた。韓国では、太平洋戦争中の日本ではどのような芸術、大衆文化があったのかということについて、ほとんど紹介されていない。しかし、センターにはそういったものに関する概要と資料が、相当数保管されていた。それらを見て、私の研究も1939～1940年の「農村映画（ドキュメンタリーニュース映画）」と結びつけることができる部分があると思った。実際にそのように作業をしてみると大変興味深く、それにより「非文字」資料がテキストに表現できないものを表現することができているという事実を知ることになった。

韓国でも最近はメディア（文化）の研究が流行している。特に（韓国）国文学専攻では、映画や音楽はもちろん、ゲームや漫画などのサブカルチャーも研究のテーマとする場合が多い。今まで私はあまりそのような研究を行ったことがなかった。しかし、今回は1940年前後の音楽、映画などについて簡単ではあるが説明する機会を得たので、この経験をもとに今後は韓国と日本の文化についても研究の範囲を広げたい。

これまで私は4回ほど関東エリアを訪れ、東京の主要な観光地を見て回った経験があった。しかし、神田神保町の古書店街は今回の日本滞在期間に初めて行った。数十店舗の古本屋が集まっているさまも美しく見えたが、それぞれに専門の分野があるという事実には、本当に感心した。韓国にも「古本屋街」はあるが、それぞれの古本屋が独自のテーマを持って運営されているところはほとんどない。神保町で文学や映画を重点的に取り上げた書店に行って好みの本をたくさん買ってきたことは強く記憶に残っている。

そして、今回の日本滞在中の最も大きな成果の一つは、横浜を舞台とした詩の背景を追跡したという点である。その詩は、イムファ（林和）の「傘を受けた横浜の埠頭」という作品である。この作品は、1929年に発表されたが、詩人は中野重治の「雨の降る品川駅」という作品を見てインスピレーションを受けてこの作品を書いたものである。中野重治は、日本のプロレタリア文学の最も重要な作家の一人であり、社会主義運動を介して、当時の植民地朝鮮人たちと連帯したいという気持ちを何度も表現した。「雨の降る品川駅」は、国際連帯を強く望む彼の願いが込められた作品である。この作品は、朝鮮の文学者にも感動を与えたようである。イムファはそのとき、朝鮮と日本のプロレタリアが連帯することを望む気持ちで「傘を受けた横浜の埠頭」を書いた。

問題は、イムファがそのときに書いた「横浜の埠頭」がどこに存在するのかということだった。みなとみらいの開発以来、横浜港は観光地になってしまったため、1929年代に「横浜の埠頭」という言葉がどこを指しているかを知ることができなかった。この問題を解決すべく松本和樹氏が助言を与えてくれた。彼の専門分野は昭和時代の労働運動と精神史の歴史研究だが、1927年ごろの横浜の地図を見せてくれて港がどこであったか、以下のとおり親切に教えてくれた。

ちなみに「傘を受けた横浜の埠頭」は、在日朝鮮人労働者が横浜の埠頭から帰国する船に乗って、自分が愛した日本人女性に伝える言葉を込めた詩である。その詩の最初の部分は、「異国の小娘よ。ドックを跳び来るな」となっている。しかし普通、船着き場とドックとの距離は離れている。そのときの話者は、朝鮮に向かう船で、「ドック」を跳び越えてくる恋人たちをどの程度の距離感で見て叫んだのだろうか。当時の横浜の地図を見ると、この問題は簡単に解決される。当時ドックから船着き場は500 m程度しか離れていなかった。これは私が直接、当時あったと思われる港に行って写真を撮りながら確認した事実だ。

松本和樹氏はこれだけではなく、関東大震災以降、在日朝鮮人の数が増えたという事実、日本のプロレタリア文学が還流した後（1935年以降）、日本文芸評論家が「社会化」について話したことに対する考えなどを教えてくださった。これらは今回の発表に非常に役に立ち、今後勉強をするときの重要な資料となりそうだ。

そのほかにもお世話になった人があまりにも多いと感じている。私の指導教員である松本和也先生は、発表テーマだけでなく、昭和初期の日本文学全般について多く

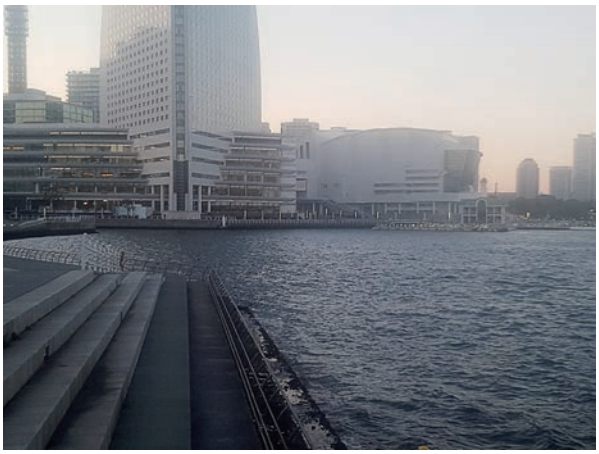

写真１　港で見た過去のドックの場所

写真２　客船を運行する今の横浜埠頭

のことを教えてくれた。姜 明采さんは松本先生と会うときの通訳をしてくれて、その後も個人的に会って、日本の近代建築に関する話をしてくれた。内田青蔵先生も研究の方針を決めるのに一役買ってくださった。成田さんを含む事務室のスタッフは、私の生活と研究に集中できるように物心両面で支援してくださった。感謝の気持ちをお返しする機会もなく帰ってきたのが申し訳ないほど、あらゆる方面の方々に助けていただいた。関わってくれたすべての方に対し、感謝の気持ちでいっぱいである。

発表当日、それまで考えがまとまっていなかった、日本文学史の争点について質問を受けたことを思い出す。興味深い質問だったが、私は韓国文学研究者として、正確な答えを示すことはできなかった。私はよく分からないと答えた後、そのような問題は、後で、日本の近代文学研究者がより詳細な研究を行ってほしいと述べた。すると、フランス文学を研究する参加者が私に提案した。韓国人が日本文化を研究して、日本人が韓国文化を研究するのも良いことだという言葉だった。フランス研究者らが、自分たちを占領統治していたドイツの文化についてもっと意味のある研究を行うことができた、という点を彼は指摘した。韓国の研究者たちが自分たちの視点で日本文学を研究し、日本の研究者が自分たちの視点で韓国の文学について研究したときに、両国の学界の発展に貢献するだろう、という言葉だった。私はその言葉を聞いて心から反省した。今までそう考えたことがなかったためである。国籍も韓国籍であり、専攻も韓国文学なので、日本で行われている研究は、私に関連のないものと考えることが多かった。しかし韓国と日本は、過去から現在に至るまでの間、地理、歴史、経済的な側面で密接な関係にあった。それだけに両国の研究者が交流を図れば、お互いの研究に役立つ面がたくさんあると思う。私はこの機会に多くのことを学び、今後も機会があれば、日本の研究者たちとの交流を続けたい。

朱舜水研究紀行

朱　子昊
（浙江工商大学）

今回の日本の旅で、私は主に優れた儒者である朱舜水の一連の非文字資料に関連する研究を行いました。今回の研究では、神奈川大学非文字資料研究センターの皆様のご指導とご協力のおかげで、予定していた研究訪問計画を完遂しただけでなく、予想以上のうれしいサポートを得ました。特に、センター長の内田青蔵教授と小熊誠教授に感謝したいと思います。また、事務室の成田紅音さんやセンターの先生が私の研究や生活における様々な問題を解決し、調査研究に便宜をはかってくださいましたことに対しても感謝申し上げます。さらに、チューターの華雪梅さんには資料収集に協力してもらって順調に今回の研究を完成させることができ、感謝しています。

朱舜水は、中国の明朝末期に日本に亡命した儒学大師です。日本には朱舜水に関する豊富な資料が残っていますが、それに対して中国ではほとんど残っていません。したがって、私はこれらの資料を収集するために日本に